



## 金融教育の現場レポート



千葉県立流山おおたかの森高等学校

仲田郁子教諭

### 「人生すごろく」で学ぶ生活設計

ここに1枚の「すごろく」があります（次頁参照）。高校卒業からスタートし、ゴールは大往生。その間、「大学受験に合格！ 行きたかった経営学部へ」「車の免許を取得、家族と初めてのドライブ」「大学卒業！ ○○社に就職」、結婚、出産、家族旅行……と人生のイベントが続きます。そのなかには、「新婚旅行先でスリにあう」といった実際には起こってほらいたくないことも、いくつか含まれています。

これは、仲田先生が家庭科の授業で生徒一人ひとりに作らせている「人生すご

ろく」の一例です。人生すごろくの制作にあたって、先生が生徒に指示することは、たったの三つ。①スタートは高校卒業とすること、②ゴールは80歳以上とすること、そして、③人生で起こり得るリスクとその対策を三つ含めることです。生徒は、A3の大きさの白い用紙を渡されると、自分の将来に想いをめぐらせ、進学、留学、就職、結婚、出産、マイホーム取得、家族旅行、老後のレジャーといった項目でマスを作り、さらに三つのリスクも加えて人生すごろくを完成させます。生徒が挙げるリスクには、盗難、病気、けが、災害、仕事での失敗、家族の死、子どもの非行など、さまざま。仲田先生は、リスクを赤い枠で囲み、それぞれの対策も書いて青い枠で囲むよう指示します。

仲田先生は、人生すごろくを通じて、生徒にどのようなことを教えているのでしょうか。

流山おおたかの森高等学校では、国際コミュニケーション科では1年次、普通科では2年次に「家庭基礎」を学びます。「人生すごろく」は、教科書の単元として

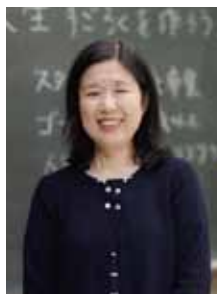
は、主に生活設計に関係します。年間カリキュラムのなかで、この単元に充てられるのは2時間程度ですが、人生すごろくは、ほかの単元ともかわりがあるので、比較的多くの時間で取り扱うこととなります」と仲田先生。

# 人生すごろくで自分の人生とリスク、それへの対策を考える

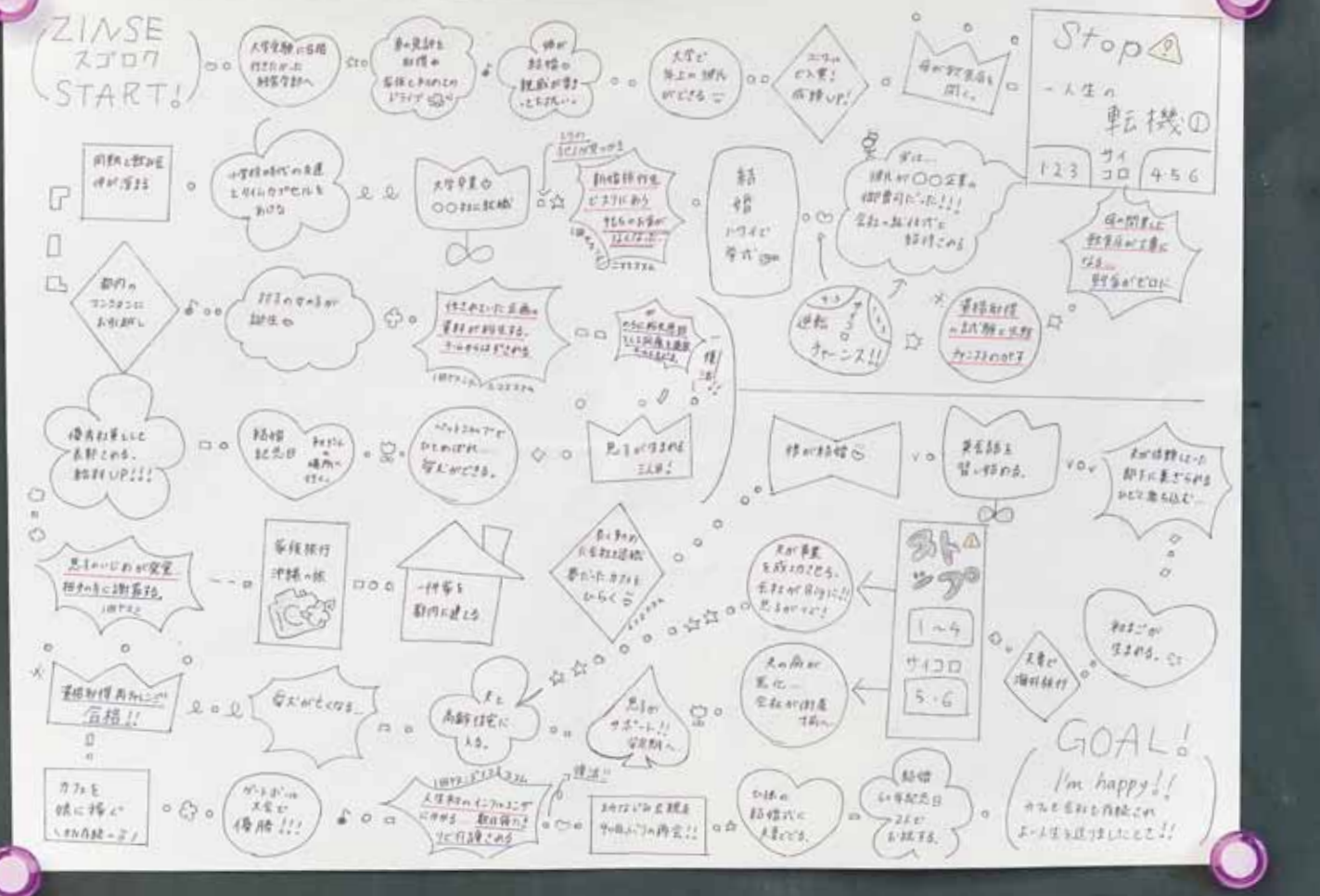
## 生活設計と社会保障制度を学ぶ。

「金融教育」は、社会のなかで生きる力を育むことを目的として行われる教育です。

このコーナーでは、金融教育の授業がどのように進められているか、教育現場に立つ先生や授業を受ける生徒の姿をレポートします。今回は千葉県立流山おおたかの森高等学校で家庭科を教える仲田郁子先生取材しました。仲田先生は「人生すごろく」を活用し、生徒が主体的に学ぶ姿勢を引き出しながら、家庭科の授業を行っています。



仲田郁子教諭



「人生すごろく」の実例。生徒は自分の将来に想いをめぐらせ、さまざまな項目のマスを作っていく。

家庭基礎では、人の一生と家族、子どもと高齢者の生活、衣食住、消費生活、生活設計などを学びます。ただ、それぞれの学習内容が生徒にとって断片的な知識にとどまるのでは、生徒が将来自立した生活を送るための実践的な力を身につけさせることはできません。このため、家庭科では「人の一生を見通す」ということをキーワードに、そうした時間軸のなかで人生や社会で生じ得るさまざまな課題に気づき、問題を解決する能力を養っていくことを目標にしているといえます。

また、例えば食に関する学習において、教科書に書かれたレシピを眺めているだけでは実際に料理を作ることができないように、生活設計をはじめとする単元においても、教科書の字面をなぞるだけの授業では生徒に実践的な力はつきません。そこで仲田先生は、人生すごろくを制作させることによって今後の自分の人生に対する想像力を喚起し、教科書の内容を立体的な理解にまで深めることを企図しているのです。

**試行錯誤を重ねながら  
人生すごろくを教材に**

家庭科の教員として30年のキャリアを持つ仲田先生は、教員になった当初、生活設計の単元の指導で戸惑ったといいます。当時の教科書では、生活設計といえ

将来どんな生活をしたいか、どんな人生を歩みたいかを問いかけ、考えさせるだけの内容でした。卒業後の進学や就職についてはイメージできても、その先のこととなると、生徒は「将来、誰と結婚するか分からない」というばかり。正直いって、指導する意味を見い出せませんでした。ちなみに、そのころ男子生徒は家庭科を学んですらいませんでした。

一方、1990年代の終わりになると、新聞・雑誌などでは盛んに生活設計について取り上げられるようになります。ここでいう生活設計は、病気やけが、失業など人生で起こり得るリスクを認識したうえで、そうしたリスクに備えながら、安定的な生活を設計していくという具体的なもので、家庭科の教科書に書かれたものとは異なっていました。同じ生活設計なのに、高校と世間では内容が大きく乖離している。仲田先生はこのことに強い違和感を覚え、一般社会で考えられている生活設計の要素を生徒に伝えようと試みます。ところが、「人生にはどのようなことが起こり得るかを知り、お金の準備も大切であることを学ぶ必要がある」ということをいくら強調したところで、生徒はまったく関心を示してくれませんでした。

どうしたら生徒に主体的に生活設計を学ばせることができるのか？ そう自問自答しているときに出会ったのが、自分の将来を描いた人生すごろくを生徒に制

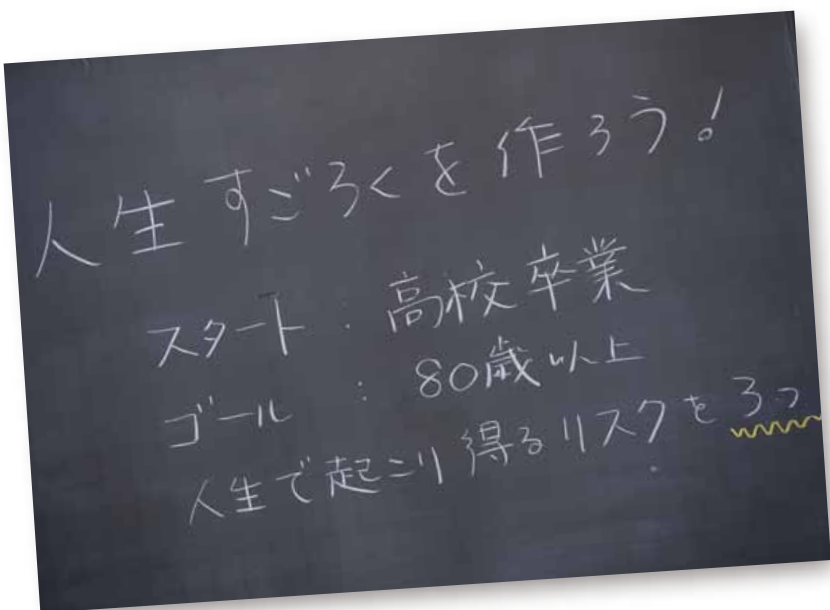
作させて、自分が書いた内容を振り返りながら学ばせる指導方法に関する論文です。「これなら、生徒が主体的に将来について考えてくれるかもしれない」と感じた仲田先生は、人生すごろくを授業のなかに導入します。夢や目標への道筋を描くことのできる人生すごろくに對する生徒の反応は、当初からとてもよいものでした。

ところが、すぐに仲田先生は壁にぶつかります。

生徒が作った人生すごろくは、そこから生活設計を学ぶことへと発展させることのできる内容ではありませんでした。「小学生時代だけを詳細に書く生徒や、25歳ぐらいで人生を終わらせてしまうような生徒も少なからずいた」のです。そのころはすごろくに書くスタートとゴールの時期を設定していませんでした。そこで仲田先生は、すごろくのスタートを高校卒業、ゴールを80歳以上に設定します。

また、高校生には社会の仕組みやセーフティネットについての知識がまったくありません。仲田先生は、「『リスク』を入れることをすごろくの要件にすれば、人生にはどんなリスクがあり、またどのように備えるかを生徒に考えてもらえるのでは」と思いつきました。

このような試行錯誤のなかで、人生すごろくを使った授業と、そのシンプルな要件「スタート…高校卒業」「ゴール…



人生すごろくのシンプルな要件は、仲田先生の試行錯誤の末に生み出された。



グループでの議論を通じて、自分自身の考え方を振り返る。

80歳以上」「人生で起こり得るリスクと対策を三つ」は生み出されたのです。

### 起こり得る リスクと対策を考える

仲田先生は、家庭科の生活設計の單元には、大きく分けて①将来どういう生活を送りたいかを考えるライフデザインの領域、②リスクを確認し対策をとる生活リスクとその管理の領域、③金銭やネットワークなどの生活資源を確認して必要な行動を考える生活資源とその管理の領域、の三つがあり、それぞれの領域は、

密接に関係していると考えています。

人生すごろくの制作を通して、自分のライフデザインを考えたい生徒は、次にクラスメートの人生すごろくを互いに鑑賞し、気づいたことをコメント用紙や付箋に書いていきます。この鑑賞を通じて、いろいろな生き方、価値観があることを感じるとともに、生きていくなかでは自分が考えたものの以外にも、さまざまなリスクがあることに気づきます。

そして、仲田先生は、自分が人生すごろくに表した人生のリスクとその対策を別紙に書き出し、それぞれのリスクへの

対策を「自分でできること」と「社会保障制度」に分類することを指示します。ところが、ほとんどの生徒は、「コツコツ貯金をする」といった「自分でできること」しか挙げません。育児で働けなくなるリスクへの対策として保育園があることすら思いつかないのです。仲田先生は、この作業を通じて、人生のリスクには「自分で努力して準備できるもの」と「自分だけでは対応できないもの」があることに気づかせていきます。

「ここまでの振り返りをしたうえで、『自助・公助』という考え方を教えていきます。もちろん『自助』として自分でも努力しなければいけません。日本には人生で困ったときに助けてくれるさまざまな社会保障制度という『公助』があることを説明します」。

また、生徒のほとんどは社会保障と私的な保険の区別ができません。そこで、

授業では「国民の義務であり、みんなを支え合っていくための社会保険」と「個人の考えに基づいて入る民間の保険」の両方があることを強調しているといえます。

次に、授業では、生徒に人生においてお金がかかるイベントとして何があるかを考えさせます。進学、結婚、住宅購入、病気など生徒が挙げた項目をもとに、計画的な生き方をするうえで、生活資源としてのお金をどのように備えるかを一緒に考えていきます。

そうしたなかで、現在、仲田先生は、ローンをどう取り上げるかについて思案中だということです。「生徒は、『貯蓄が一番、コツコツ貯めよう』『保険にはいろいろと入りたい』、そして『ローンには極力頼りたくない』といえます。借金は怖いものと感じているのです。しかし、住宅を購入するときはローンを組むのが当たり前のように、ときにはローンをうまく活用する必要がある、それも人生を切り開くための一つの方法です。そのことをどう効果的に生徒に教えるか、いろいろと考えています」。

## ライフスタイルの選択とお金の関係を考える

人生すごろくの制作と最後の授業を通じて、人生に起きるイベントとリスク、それへの対策を学んだ生徒は、次に「ライフコース別家計シミュレーション」に

取り組みます。市販の教材を使って、生きていくためにはどれくらい生活費が必要かをインターネットを使って調べながら、家庭のライフスタイルによって必要な収入額が異なることを具体的に実感する学習です。

例えば結婚後の家計については、30歳の夫婦という前提で、①夫婦とも正社員で子どもがいない場合、②夫が正社員で専業主婦の妻と子ども1人の場合、そして③夫が正社員でパート勤めする妻と子ども2人の場合、の3パターンを用意します。ひと月あたりの平均的な収入から支出を食費、住居費、おこづかいなどに割り振り、そこに「月に1度は外食したいからプラス1万円」や「食事で節約したいからマイナス1万円」など、想定する金額を入れていきます。可処分所得の範囲に支出を収めることを前提とし、月の収支を赤字にするのは禁止です。教材は、シールを貼りながら収支を組み立てられるもので、生徒は楽しみながら取り組みます。具体的な数字を扱うと生徒もリアリティを感じ、反応がよくなっています。

仲田先生はこういった作業や授業にグループディスカッションを織り交ぜていきます。興味深いのは、家計シミュレーションを終えた後の生徒の変化です。

「ほとんどの生徒は男女を問わず、子どもが生まれたら妻は仕事を辞めるものだと考えています。でも、家計シミュレ

ーションをしてみて、夫だけが働く家計が苦しくて十分な貯蓄ができないことを知ると、『子どもが生まれても仕事を続けてみようと思った』と考え方を変える女子生徒もたくさんいますし、『妻、がんばって働いてくれ！』といいながらシールを貼る男子生徒もいます」。

夫婦ともに働き続けると考える生徒がいないのは、きっと身近なロールモデルがないからだと言います。仲田先生は「子どもが生まれると妻は専業主婦になるという、その固定観念には根深いものがあります。無意識のうちに固定的な性別役割に囚われているようです。簡単に変わるものではありませんが、この授業がそういった価値観について考えるきっかけになればと思います」。

グループディスカッションで仲田先生が心がけているのは、単に自分の意見を言うだけでなく、相手の意見を聞いてそれに反対の意見を考える時間を設けることです。ある男子生徒が「共働きが必要なのは分かったけれど、自分の家は母が専業主婦でも大丈夫だから、僕が結婚したときも妻には家庭に入ってほしい」という意見を言うと、「君の家庭はそうかもしれないが、一般的な家庭では共働きでないと成り立たない。将来は共働きを前提として考えるべきだ」という反対意見が出ました。議論を通じて、自分の意見を発し、反論されることで自分の考え方を振り返る機会になっているのです。

## 大人になる前の高校生に人生を見通す術の種をまきたい

仲田先生は、人生すごろくの内容やグループでの議論について、必ずしも教師は常に結論を出さなくてもよいと考えています。

「自分が書いたものを振り返り、友達がいかに書いたものを見て何かを感じる。そこからの気づきが大切です。『大人になるってこういうことか。ああ、自分は何も知らなかったんだ』と気づくための作業ともいえるかもしれません」。

かつて、お金に関する生々しいことを高校で教えるのはふさわしくないという風潮もあったそうです。しかし、仲田先生は、一般的な制度や仕組みについてだけを見ても高校時代に教えるべきことは数多くあると考えています。

選挙権年齢は18歳に引き下げられ、現在議論されている成年年齢の引き下げも実現すれば、「高校を卒業すれば世間からは否応なく大人と見なされる」という状況に教え子が置かれてしまうことを仲田先生は案じています。

「高校はいわば大人になる前の最終段階です。この授業を受けたからといって短期的な成果は見えません。でも、それぞれの生徒には卒業後に自立しながら、助け合うところは助け合って幸せに生きていってほしい。その術を手に入れるための『種』は確実にまいておきたいのです」。